

第27回庭野平和賞 贈呈理由

エラ・ラメシュ・バット女史は「自営女性労働者協会」(Self Employed Women's Association, SEWA)の創始者で事務総長も務めた女性労働運動のリーダーである。SEWAは1972年に設立され、インドのアーメダバードを拠点に女性労働者たちの経済的自立と完全雇用を求めて活動、会員は120万人に達する。彼女は、インド国内の貧しい女性労働者及び自営業者が自立し、経済的に豊かになって自信を持ち、経営能力を高め、自己決定できる人間になるための教育に尽力している。彼女とSEWAの活動は、ガンジー主義の哲学に基づいた宗教的精神をベースに、女性の経済的自立を推進し、社会変革のための組織化を目指している。

バット女史はインドにおける女性労働者の社会的地位をよく認識し、女性労働者及び自営業者を取り巻く経済的社会的変革の必要性を痛感している。彼女は女性たちがその運動のリーダーとなり、その中で彼女たちがより多く目に見える存在となるようにと教育してきた。「女性が社会変革のリーダーにならなくてはいけない」との信念を持ち、30年以上の間インドの貧しい女性のために働き、女性労働者及び自営業者の組織を育て、マイクロクレジット銀行（主に発展途上国の小規模事業者に低金利で小額の資金を貸し出すこと）が多くの女性労働者及び自営業者を支えてきた。

「平等と社会正義のために戦う武器は、愛と非暴力なので、そのような戦いのリーダーは当然女性なのです」(Urban Age (都市の時代) 編集長のマルガレータ・ベルゲンと、開発問題専門家であり、ニューデリーをベースに活動するジャーナリストでUrban Ageのアジア特派員であるパトラケカ・チャッテルジーによる)

バット女史は、「ガンジー主義思想はSEWAの貧しい自営業の女性たちの道しるべとなり、社会改革を組織する原動力となっています。私たちはサティヤ（真実）、アヒムサー（非暴力）、サルヴァダルマ（全ての宗教と全ての人を統合すること）、そしてカーディ（地域の雇用と経済的自立の推進）の教えに従っています」と述べている。また、「世界の問題が暴力で解決した事がありますか？あなたの敵に向かって石を投げようと手を振り上げた瞬間、それは法と秩序の問題となり、社会の大儀ではなくなってしまうのです。そして社会はあなた方を支援しなくなるのです。雇用主がSEWAの組合を他の労働組合より評価するのは、誠実だからです。SEWAがストライキをし、労働をストップす

るのは最後の手段であり、交渉の道が全て閉ざされた時だけです。私たちは実力行使をする前に、敵対者に対し誠実に伝えます。私たちの要求は最小限であり、道義に適ったものです。このような事がガンジー哲学の実践なのです」と語る。

バット女史は、社会の多くの分野の人々と協力して仕事をしてきた。彼女の実践的戦略は、労働組合運動と協同組合運動を組み合わせることによって養われてきた。SEWA運動はsangam、または「三つの運動」、が合流することにより発展した。その三つの運動とは労働運動、協同運動、女性運動である。

バット女史は高潔な人格の持ち主で、ゆるぎない非暴力の実践から備わったものである。彼女は貧しい人々の話をよく聴く慈悲深い女性である。彼女の性格と自己抑制は宗教心による鍛錬から養われた。彼女は攻撃的な手段を用いずに自分の意志を通す術を知っている稀有な人物である。

上記の理由から、庭野平和賞委員会は、エラ・ラメシュ・バット女史を第27回庭野平和賞に選出した。私たちは「このような個人の業績を世界に広く知らしめ、その業績が世の人々を啓発し、将来世界平和の実現に献身する人々がさらに多く輩出されるよう」念願するものである。